

異文化社会における子育てに関する考察
— ニュージーランド在留邦人ママたちへのインタビュー調査より —

宮 嶋 淳

Upbringing of Children in The Society with Diverse Cultures
— Interview Survey of New Zealand Residents Japanese Moms —

Jun Miyajima

人間福祉学会誌 第16巻第2号 別刷 (2017年3月)

Reprinted from THE JOURNAL
OF HUMAN WELL-BEING
Vol.16 No.2 : 11~17 (March 2017)
SEKI, GIFU, JAPAN

異文化社会における子育てに関する考察

— ニュージーランド在留邦人ママたちへのインタビュー調査より —

Upbringing of Children in The Society with Diverse Cultures

— Interview Survey of New Zealand Residents Japanese Moms —

宮 嶋 淳*

Jun Miyajima

抄録：本論は、ニュージーランドを選択して子育て移住した日本人ママたちにインタビューを行い、国境を越えた子育ての課題と特徴を、ママたちの発話からカテゴリー並びに因子として抽出し、子育て移住を選択したママたちへのグローバル・アプローチのあり方を探求した。

その結果、子育て移住したママたちは、移住先における Social policy が国民と移民との間で格差なく提供される中においても、文化的アイデンティティを背景因子として、ママたちが「よそ者」感覚から解放されることはない。したがって、子育て移住を選択したママたちを Human well-being からエクスクルージョンしないために受け入れ国は、子育て移住を選択したママたちがなす、個人的な選択やそれを尊重したネットワークづくりについて、サポートイブであることが必要とされていることが示唆された。

Abstract : This paper discusses the results of the interviews on Japanese mothers who choose to upbringing their children by New Zealand. I picked up the child-rearing challenges and features, and to explore the way of the global approach to the moms.

As a result, moms to be the child-rearing to the cross-border, even if there is no disparity on social policy between the citizens and the immigrants, under the influence of her identity, will not be released from "outsiders" feeling it was found.

Therefore, if they would to select the cross-border, the moms and children would need to inclusion that growth in Human well-being through the cross-border. And the countries to accept the immigrant must be to respect supportive care to the moms of the selection and their networks.

キーワード：子育て移住、ニュージーランド、ソーシャル・ポリシー、インタビュー調査

Keywords : Upbringing of children, New Zealand, Social policy, Interview Survey

I. はじめに

本格的に進行しはじめたグローバル化は「どこで子育てを行うか」という子育ての場を、国境を越えて選択することを可能とした。このような国境を越えて子育てを行なう場を選択することを本論では「子育て移住」と呼ぶ。子育て移住は、世界各地から日本への移住ばかりでなく、その逆も可能とし、福島原発事故以降、原発のない国＝ニュージーランドへの子育て移住は増加している。

国境を越える移住・移民の問題は、国内外の Human

well-being との関係で「グローバル・イシュー」の1つとみなされ、各々の国と地域における国民と移民との間の利害関係に関わり、グローバルな視点からの Human well-being や Social policy の研究が求められている。

そこで本論では、ニュージーランドという国を選択して子育て移住した日本人ママたちにインタビューを行い、国境を越えた子育ての特徴をカテゴリー因子として抽出し、子育て移住を選択したママたちへのグローバル・アプローチのあり方を探求した。

* 中部学院大学 人間福祉学部

II. ニュージーランドが選ばれる理由

「子どもとは」「子育てとは」どのようなことなのだろうか。まず、日本子ども学会や日本子どもソーシャルワーク学会の認識を引用し、その手掛かりを得ておきたい。

日本子ども学会は、その設立趣意として、「子どもは、私たち大人が適切な育児・保育・教育を保障しなければ、その身体の成長も心の発達も損なわれる危険」に晒された存在であり、子どもとは「つねに“Children at risk (危機にある子どもたち)”と認識している¹⁾。そして、子どもたちのリスクを取り除くためには、「子どものことを考え、子どもの立場に立って、子どもの生活環境の中にあるすべてのモノやコトをデザインする“Child-Caring Design (成育デザイン)”が必須」としている。ここで示された子どものリスクを回避する成育デザインの1つに、「子育て移住」があると考えられる。子育て移住は、福島から日本国内各地はいうに及ばず、国外にも広がっている。その中でもニュージーランドは子育て移住後として選ばれる実数が多い²⁾。ニュージーランドへの子育て移住は、原発事故以前にも多く認められ、松川は「①一人で背負い込まなくてよく、周囲に助けを求めやすい、②乳幼児とのコミュニケーションが取りやすい、③親が子育ての喜びと自身を感じられるような支援が整っている」と要約している³⁾。この見解から、ニュージーランドとは子育てを助け合いの中で充実させ、支援の仕組みを整えている国と理解できる。

子育て支援の仕組みの基底として日本子どもソーシャルワーク協会の見解を確認しておけば、「こどもたちとの出会いをとおし、今の『子どもたちの問題』は、実は子ども問題でなく、『大人、社会の問題』である」と強く感じており、「子どもたちが『そのままである』ことを認めてくれる大人の存在、自分を『受けとめてくれる大人』との出会い」とおして、「自己肯定感を取り戻し、再び自分の力で成長をはじめていく姿」が認められるのだとしている⁴⁾。子どもが自己肯定感を育てていくためには、子どものありのままを受け止める大人の存在が必要だというのだ。この姿勢こそ、ソーシャルワークにいう「受容」の具現化であり、子育て支援は親や大人を媒介にしたソーシャルワーク実践なのである。日本子どもソーシャルワーク協会が示した理念は、適切な環境の中で、子どもが育つことや保護されることを権利としてとらえ、その充実を図っていくという姿勢であり、そのための研究と行動を極めようという決意であろう。

筆者が注目するのは、国境を越えた子育てについてである。国境を超え、日本人ママたちがニュージーランドでどのような子育てを経験し、どのような思いで今を生き抜いているのか、インタビュー調査から検討した。本論ではその内容を報告し、これからの子育て移住について考察していく。その上で、子育て移住を選択したママ

たちへのサポートのあり方を提示する。

なお、異文化の中での「子育て」に関する研究はそれほど多くなく、佐藤は異文化の中での教育についての研究の視点として①文化的対立の克服、②研究者の視点と志向性への留意、③文化間移動の将来的影響への留意を示しており⁵⁾、本論においても佐藤の見解に留意しつつ、論を展開したい。

III. 調査の結果

(1) 調査の概要

目的： ニュージーランド（以下「NZ」と略す。）に在住する日本人ママたちが抱える、子育てに関する語りを聴取し、異国で子育てをする者の支援の在り方を明らかにする。

期日： 2011年9月、2012年3月、2013年3月、2014年3月、2015年10月の計5回、NZを訪問し、その都度、プライベートの守られる公共の会議室やホテルのロビーを活用し、インタビュー調査をおこなった。

場所： NZ・ダニーデン市、クライストチャーチ市、オークランド市、ウェリントン市

対象者： 30歳代～50歳代までのNZで子育てをしている、またはした経験のある日本人ママたち6名

対象者の概要：30歳代・1名 40歳代・4名
50歳代・1名

方法： 以下に示す質問項目を提示した半構造化面接法とした。

倫理的配慮： 対象者に調査の趣旨を説明し、ICレコーダーにインタビュー内容を録音すること、並びに語りをデータ化し、研究目的のために活用することの了解を得た。

(2) 調査の結果

まず「NZで子育てをすることになった経緯を教えてください。」について、ママたちへのインタビュー調査結果を類型化すると表1のように整理できる。

表1 NZで子育てをすることになった理由

類型	きっかけ	選択の理由
1(1)	1. ワーキングホリデーでNZに渡航	(1)留学中に出会い
1(2)		(2)再訪問時に出会い
2(1)	2. 日本でNZ人とカッパルになる	(1)とにかく夫の国へ
2(2)		(2)日本の生きづらさを逃れてNZへ
2(3)		(3)子育ての場を吟味してNZへ

表1で示した5つの類型を背景として、NZでの子育てを左右する従属変数として「①英語力/コミュニケーション力」「②仕事/キャリア」「③夫/家族」「④支援/機会へのアクセス」「⑤その他個人的事情」が想定できた。表1で示したママたちの属性に加え、ママたちの置かれた個人的事情を加味すると、次のような従属変数が導かれる。

- 【①英語力/コミュニケーション力】
- 【②仕事/キャリア】 【③夫/家族】
- 【④支援/機会へのアクセス】 【⑤その他個人的事情】

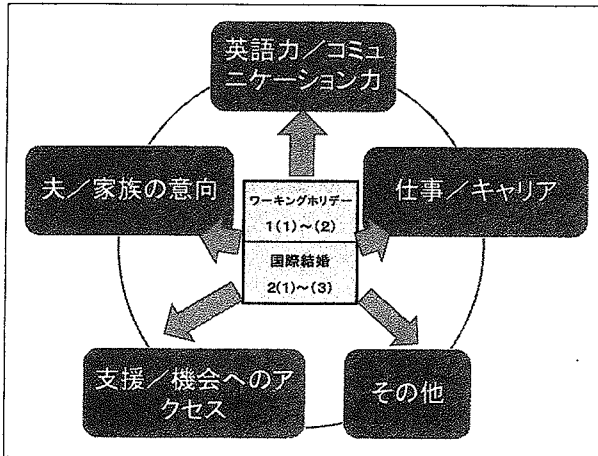


図1 NZ在留邦人ママたちの子育てを困難にする要素

NZで子育てをすることになった直接的な理由とともに、NZでの子育ての困難さは、これら個人的な事情が加味され、個人差として表出されている。これをまとめると図1のようになる。

図1をみると、ワーキングホリデーを活用してNZという場を好きになって移住するにしても、NZ人を好きになって移住するにしても、その先で子育てを行う時、個人の力量やキャリアによって、多い・少ない、の違い

があるにせよ、誰もが直面する問題が構造的に存在することが理解できる。ここに抽出した「子育て上の構造的な困難」は、移民のみでなく、原住民にとっても生じする困難も当然、含まれており、移住者への対応と原住民への対応をサービス提供レベルで、共同/分離を考慮し、どのようなシステムのもとでサービスを提供しなければならないのかを検討すべきであろう。

次に「子育て中に活用したNZの制度やサービス・オプションにどのようなものがありますか。」について尋ねたところ、図2が得られた。各々のサービスに対する「評価」には個人差があり、個別事情が色濃く表出されていたので、具体的な内容に関する発話は掲載しない。インタビューから把握できたNZで日本人ママたちが活用できた子育て支援・サービスを模式図にしてみると、図2のようになる。各サービスの具体的な内容は別記するが、日本との明らかな違いは、「選択できる支援・サービスの幅」と「自己選択・決定の幅」に見出すことができそうだ。

続いて「外国人だから活用できなかった、あるいは活用しづらい制度やサービス・オプションにはどのようなものがありましたか。」に対する回答は、「基本的にはない」で共通していた。ただし、心情的な留意が必要だと思われる発話がいくつか散見されたので、抽出しておきたい。

- ・日本人同士って、人間関係が濃くなっちゃうんで、ちょっと面倒くさかった。外国で日本人同士集まっちゃうと、日本人の社会が凝縮しちゃったみたい。それは多分、入ってみたらそうじゃなかったのかもしれないけど、面倒くさいんじゃないかと思ってしまって、最初からそこには行かなかったです。【名づけ1：濃い人間関係は嫌】
- ・子育てのプロセスで、もともとの友達とのコンタクトを失ってしまった。子どもがいるってということで、今まで付き合いがなかった人の中に飛びこまないと駄

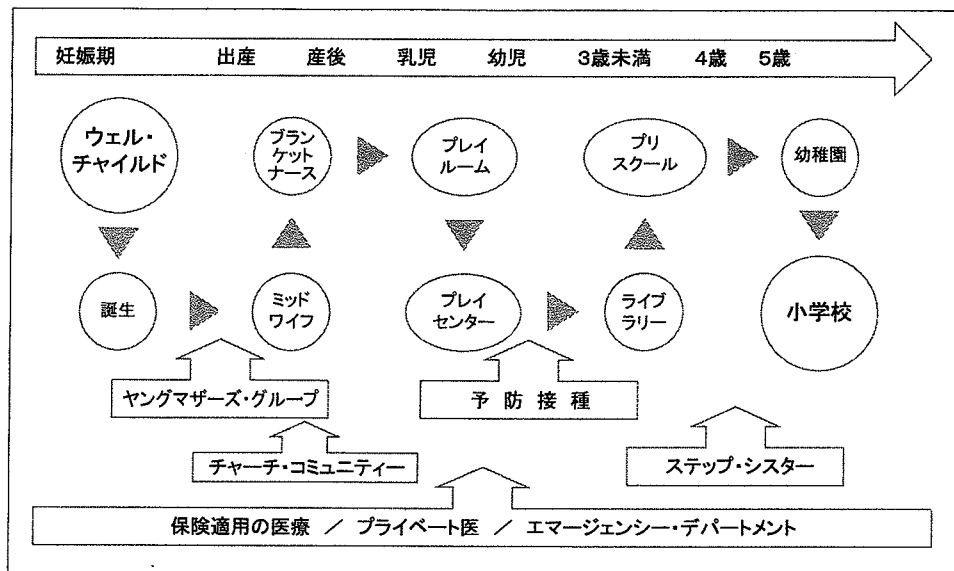


図2 日本人ママたちが活用した子育て支援・サービス

目っていうことは、顔ぶれも悪くて、自分の度胸も足りなくて、うまくいかなかった。**【名づけ2：仲良しのコンタクトを失う】**

・私は収入のレベルで、「預けてしまえる派」のプリスクールを利用できなかったのも、私の仲のいい友達とははなれてしまった。**【名づけ3：仲良しの再構築の力はない】**

・私は、自分が子育てにすごく参加したい親だったので、プレイグループとかを選んだ。選んだグループが、実際の友達のグループとうまくオーバーラップしなかったので大変でした。**【名づけ4：参加したいグループと仲良しグループが異なる苦しみ】**

・本当の友達は子育て終わっちゃっていた。2人目を産むのが遅かったので、1人目のときに仲良くなった友達は、もう仕事始めたりしちゃっていた。だから、しんどかったです。**【名づけ5：友達のいないしんどさ】**

・もちろんコミュニティの中で子育てやっていくんですけど、わざわざ遠くの昔の友達とかに会わないんです。で、コミュニティの中で、自分のライフスタイルにあった友達同士がひっついていくので、派閥がすごい大きかったです。特に私が住んでいたのは、地続きのコミュニティが止まって、その間に牧場があり、コミュニティがない、郊外の間が空いてしまっているコミュニティだったのです。**【名づけ6：派閥化する閉じたコミュニティ】**

・コミュニティ間が車で約10分前後。交通ラッシュのときはもっとかかる。その間には家も1軒もないし、歩いても行ける距離ではないので、今住んでいるコミュニティでうまく立ち回って、子育てとライフスタイルを共有する人を見つけないと、そのコミュニティの中で、いくら政府が作ってくれたサービスがあっても利用できないんです。**【名づけ7：コミュニティ×仲間×サービス利用の相関】**

・実際に、シュタイナー教育の幼稚園に行っていた友達が、いたたまれなくなって市内に引っ越しました。彼女はNZ人なんですけど、別れた旦那さんが、本当に純粋なアフリカ人でかなり色が黒い方。すごく民族的な人種差別っていうのが、そういう閉鎖的なコミュニティでは目に付くってことで、彼女はそれに耐えられなくなって引っ越していきました。**【名づけ8：閉鎖的なコミュニティでの人種差別】**

・私が住んでいるときにそのコミュニティに居たアジア人は、私と同じぐらいの歳の韓国人で子どもが2人居る女性と、私たちよりも一回り若いタイの女性が、私の下の子どもぐらいの歳の子をつれていた。彼女を入れて3人しか居なかったんです。あと、ほとんど白人。そこそこの仕事を持った、どちらかというと真ん中より上寄りに近い方が多かったのも、外国人のハンデとか、民族的なハンデがあって、どの派閥にも入れない。**【名づけ9：民族的な、あるいは外国人としてのハンデ】**

・孤立してしまうお母さんもいます。でも、本当にNZ人のお母さんは、はっきりとしています。どれを選ぶか、どうするのかってということについて、「何もしない」ってことを選んだお母さんも、それはそれで正しいのはっきりしているのも、「すぐ仕事に戻る」っていう選択を、はっきり決めていることも多い。**【名づけ10：孤立してもはっきりしているママ】**

・女性が意見をはっきり言う国っていうのは、昔からそう、はっきりしています。ですから、学校で手伝いに行くお母さんも、公共奉仕グループとか、英語で名前を付けて、メンバーも決まっちゃっているんです。**【名づけ11：意見もメンバーもはっきりしているママ友】**

・ちょっと入った瞬間にアジア人に慣れていないキウイのお母さんばかりのグループだとやっぱり感じますね、戸惑いを。向こうもどうしていいのかわからないし、私も緊張する。やっぱりインクルーシブじゃなかった。インクルーシブじゃない。エクスクルーシブで、包み込んだ感じではなかった。ウェルカムという感じではなかった。「え、どうしよう。アジア人が来た」って感じ。**【名づけ12：お互いの戸惑い×エクスクルーション】**

・活動しづらい。やっぱり特に外国人だからという言葉の壁で行かない人が多かったのではないのでしょうか。**【名づけ13：言葉の壁で活動しづらい】**

上記で抽出したとおり、配慮が必要な日本人ママたちの発話に、各々【名づけ】を行なった。**【名づけ】**とは、当該発話に対するテーマ・主題を意味している。発話の主題である13の【名づけ】を、その文脈上のつながりから判断し、構造化を試みたところ、図3が得られた。

図3に認められるように、日本人もアジア人もNZ人も各々、子育て仲間を求めているママたちが多くいることは、例外を除き、概ね明らかだと認識できる。その上で、子育て仲間について、様々な意見が交わされており、本調査で得られた発話記録に基づく、子育て仲間は一つのコミュニティとして捉えられる。また、実際の地理的コミュニティとも関係が深く、子育て支援サービスへのアクセスと相関を認め得る発話も得られている。ママたちの子育てにおける仲間づくりは、子どもという存在を媒介として、相互の接近が可能となる諸要因を有していると考えられるが、個人の特性に加え、言葉・民族性・閉鎖性などを介して「戸惑い」として表出され、相対的なエクスクルーションを生起している。

さらに「子育て中に、自分が外国人だなと感じる出来事（肯定的なこと・否定的なこと）がありましたか。具体的にはどのような出来事でしょうか。」に対して、得られた発話をIBM SPSS Text Analytics for Surveys4.0でカテゴリー化し、頻出度を計算すると、表2のようなカテゴリーと図4のようなカテゴリー・サークルが描けた。

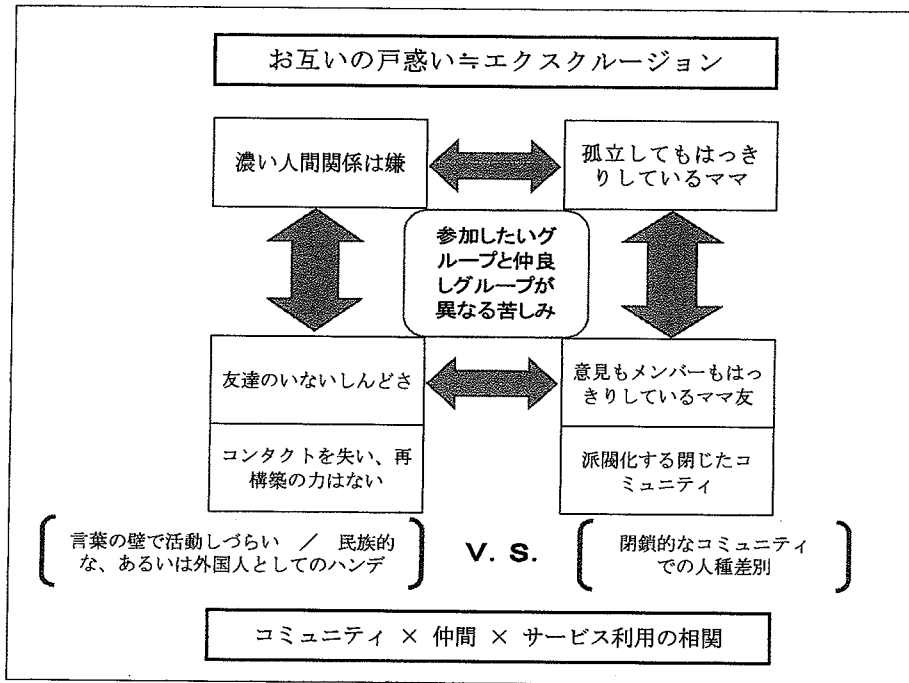


図3 子育て仲間におけるエクスクルージョン

表2 子育てを通じて自分を外国人だと感じる出来事に関するカテゴリー

カテゴリー	頻出数	%
私、自分、母	29	26.6
人、白人、こっちの人	20	18.3
子ども	15	13.8
言葉、英語/日本語	13	11.9
国、日本人	6	5.5
子育て	6	5.5
愛情	4	3.7
関係	3	2.8
自分のこと	2	1.8
お手伝い	2	1.8
ご飯	2	1.8
システム、使い方	2	1.8
思うこと、不安	2	1.8
その他	3	2.7
	109	100.0

図4並びに表2において了解できることは、子育てを通じて自分を外国人だと感じる出来事は、自身の日本人として、母として、人として、自分自身が子どもに対してどのようなかわりを持つようとしているのかに関わる。そしてその中心は、英語という言語と愛情という対人関係に係る表現に関わっている。NZで子育てをする日本人ママたちにとって、言語と対人関係表現は自分たちを日本人と強く認識せざるを得ない、NZ人との違いであると認識されていると考えられる。

松川が示唆した「ママたちと子どもとのコミュニケー

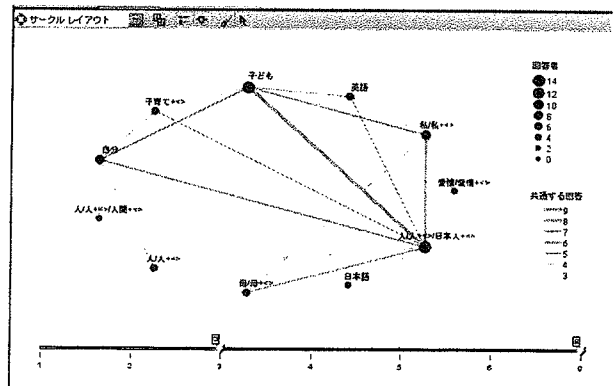


図4 子育てを通じて自分を外国人だと感じる出来事に関するカテゴリー・サークル

ション」に着目し、「子育て中に、『子どもから学んだこと』はどのようなことでしょうか。エピソードを交えて教えてください。」と尋ねたところ、この設問に対して、ストレートに「子どもから学んだこと」を語って頂けた発話は次の4点であった。

【発話1】事務的な申請をしたり、ちょっと手続き上でトラブったときなんか、例えば「電話で言われることが分からないから、事務所に行って書いていただけますか?」とか、それで落ち込んで「言葉の壁が」とか言っているときに、娘が「大丈夫」って。「電話は難しいし、書いてもらったら、読み書きの力は、ママはニュージーランド人よりも、むしろできるし、学校の友達のお母さんで法学部出てる人なんて居ないから」と言ってくれました。

【発話2】子育てから学んだことじゃなくて褒めてもらったことはすごい。あ、私できているのかなって確

認をさせてもらいました。だから、すごくラッキーでした。私ができていたというよりも、子どもがすごく親思いだったのかもしれませんが。でも、よくやりましたねというのを、すごくくれるんですよ。

【発話3】私の場合、子育て中に子どもから学んだことというのは、子育てってこんなに楽しいんだというのを学んだんですよ。

【発話4】同じ父親と母親から生まれてきても、こうも違う子どもが生まれてくるのかと実感したこと。やっぱり、個人というか、一人ひとり違うし、それに対する対処の仕方もちがいが、私を変えなければいけないんだなと。上の子は、まず逆らわないし、何でしょう、結構センシティブだから、怒ったりすると泣いちゃったりとかありますけど。下の子は、超反抗的で。まず、怒ったら逆切れるタイプですから。だから、そういう意味で、子どもから学んだことっていうのは何だろうな、対処の仕方がな。

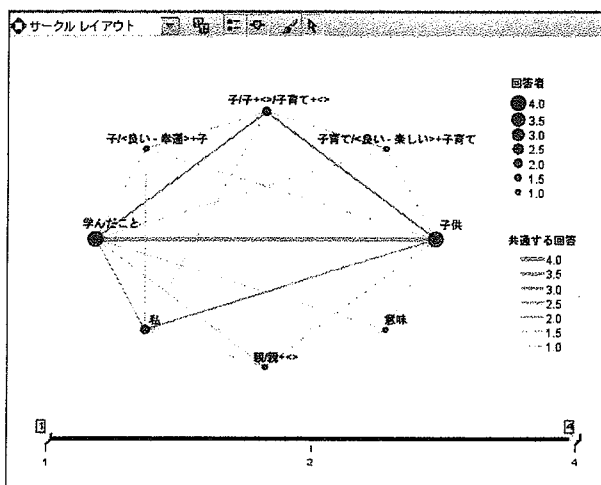


図5 「子どもから学んだこと」に関する
カテゴリー・サークル

上記の【発話1～4】並びに図5に見られるように、ママたちは子どもから「子育て」「幸運」「楽しさ」並びに私が親であることの「意味」などを学んだと認識している。日本人ママたちは「愛情表現」と「報われ」体験を、子どもとのコミュニケーションの中で見出し出していることがわかる。

IV. 考 察

上記のようにNZで子育てを行う、あるいは行った経験のある日本人ママたちへのインタビュー調査結果を抽出し、発話のコンテキスト、並びに発話のカテゴリー分析を行ったところ、以下のことが明らかとなった。

図1からNZで子育てをする経緯には2類型5パターンが考えられ、それに加えて、誰にでも生じる「子育て」の困難さを引き受けていかざるを得ない状況が垣間見ら

れた。移住者は、ママとなる者の育ちやキャリアなどの属性に応じて生起する困難が異なり、文化的アイデンティティーに即した固有のサービス提供を求めていることが明らかにされた。したがって、サービス提供時に、現住のママたちに比して、異なる対応と協働の対応のどちらが好ましいのか、アセスメントが求められる。そのような共同/分離を選択可能としたサービス提供の機会があるほうが、ママたちの不安が解消され、満足度が高まる可能性がある。

公的あるいは認可された各種サービスは、ほぼNZ在住の日本人ママたち誰もが活用できるようであり、施策的な配慮はなされているといえるということが明らかになった。日本との明らかな違いは、「選択できる支援・サービス」に多様性と幅があることであり、提示された「選択できる支援・サービス」をいかに日本人ママたちが自己で選択し、自分で決定していくのかにも「幅」があるということである。つまり、NZの子育て施策・サービスは、子育てに関する切れ目のない十分に選択可能なサービスを用意している。そして、選択の目をママたちが育てられるよう参加型のサービスも、公的支援の対象として、教育的配慮がなされている点が示唆的である。

図3で示した「子育て仲間におけるエクスクルージョン」という構図は、ママたちが自己選択していく子育ての場に関わって、重要な意味を持つ。それは「参加」ということであり、現住のママたちのグループに子育てを移住を選択したママたちが参加しようとする場合に難しさがあることを指摘できる。一旦軌道にのったグループに「よそ者」感覚を持つママたちが加わり、グループの協働を円滑化させていくことは大きな試練と壁がある。その意味でも、グラノベッターによる紐帯理論をコミュニティ形成のためだけではなく⁶⁾、子育てネットやママ友サークルにも援用し、ママたちのためのネットワーク理論の構築を急ぐ必要があるだろう。

ママたちが「子どもから学んだこと」は、キーワードが示す通り「子育て」「幸運」「楽しさ」である。少子化対策をいうならば、この点からの考察と施策づくりが欠かせないのではないかと。そして、ママたちは他者から様々な教育・指導を受け、モデリングしつつ、自ら子育てを上手に行おうとしている。施策上必要なことは、コントロールではなく、子育てを見守ることであり、経済的な負担を意識しなくても良い安心感を醸成することだという示唆を得た。

本論の結論は、子育て移住を選択したママたちは、自らを「よそ者」という感覚から完全には解放されていない。つまり、ママたちの意識の中にある、NZ人とNZという地において、自らが外国人である＝「よそ者」であるという感覚と結びついた結果が得られている。それは、図4並びに表2において了解できるように、【英語という言葉】と【愛情という対人関係にかかる表現】が、日本人ママたちを消極的にさせているということからわ

かる。そのため、NZで子育てをする日本人ママたちにとって、言語と対人関係表現は自分たちを日本人と強く認識せざるを得ない共通項として、省みられている。したがって、子育て移住を選択したママたちを Human well-being からエクスクルージョンしないために受け入れ国は、子育て移住を選択したママたちがなす、個人的な選択やそれを尊重した「弱い紐帯」づくりについて、サポータイプであることが必要とされていることが示唆された。

今回のインタビュー調査では、グローバル・イシューとしての原発事故を原因とする子育て移民を行なったケースはなかった。今後の課題としておきたい。

なお、本研究は JSPS 科研費26380790の助成を受けたものである。

引用及び参考文献

- 1) 日本子ども学会 (<http://www.blog.crn.or.jp/kodomogaku/>) 2016.7.1.検索
- 2) こどもニュージーランド (<http://kodomo.nz/>) 2016.6.2.検索
- 3) 松川由紀子『ニュージーランドの子育てに学ぶ 親に優しいスロー保育の伝統と現状』小学館, 2004
- 4) 日本子どもソーシャルワーク協会 (<http://www.jcsw.jp/>) 2016.6.2.検索
- 5) 佐藤郡衛『異文化間教育—文化間移動と子どもの教育—』明石書店, 2010
- 6) 野沢慎司ほか編著『リーディングス ネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 2006